

伝祇園南海筆「山水図巻」(東京国立博物館蔵)について

安永拓世(東京文化財研究所)

伝祇園南海筆「山水図巻」(東京国立博物館蔵)は、和歌山から中辺路・本宮・新宮を経て那智滝へと至る、熊野の参詣道を描いた江戸時代の画卷である。巻頭の題字や、画面上半の和歌などを記した部分は、天明2年(1782)に喜斎大人なる人物が書き、画面下半の絵は、それ以前に描かれたことがわかる。画中には署名や款記がないため、筆者を特定できないが、天保13年(1842)に心斎という人物によって記された巻末の跋文によると、絵の筆者は祇園南海(1676～1751)で、彼が何度か訪れた熊野の途上で、その景勝を写したものであるが、未完成だったために署名を入れなかったのだという。

筆者とされる祇園南海は、紀伊藩の儒学者で、詩書画をよくし、日本の初期文人画家としても著名な人物だが、その絵画作例は墨梅や墨竹などの四君子が大半であり、山水図の作例はあまり多くない。この「山水図巻」が、やや漠然と「伝祇園南海筆」とされてきたのも、そうした山水図の比較作例が少なかったからといえよう。

ただ、この「山水図巻」が南海筆であると認められるならば、日本の初期文人画家が手がけた、かなり早い時期の真景図として意義深い作例となる。比較的实景に即した真景図的な紀行図の先行作例としては、百拙元養筆「城崎温泉勝景図巻」(兵庫県立歴史博物館蔵)が知られており、その関連性も想定されるが、伝南海筆「山水図巻」では、雨、月、夕日などの気象や天候に関する実感に富んだ描写が確認でき、筆者の実際の紀行上での体験が画中に表現されているようにも見える。すなわち、彭城百川筆「近江京名所図巻」(現在所在不明)や、池大雅筆「陸奥奇勝図巻」(九州国立博物館蔵)に見られるような、実感に富む真景表現の萌芽をうかがわせる点で、あらためて、「山水図巻」の位置づけが重要な意味を帯びてくる可能性もあるのである。こうした中であって、近年、南海の山水図がいくつか新たに発見されるなど、南海の画業や画風について、徐々に明らかになってきている。

そこで、本発表では、まず、近年の南海研究の成果を生かしつつ、従来、あまり紹介されることのなかった「山水図巻」の描写や表現の細かい分析をおこない、南海の新出画の表現との比較を試みたい。すると、山の形に沿って平面的に施された淡墨や、濃墨の筆先で点々と描いた樹木、山壁に点苔と呼ばれる濃墨の点を施す表現や、台地状の崖の描き方など、両者にいくつかの類似点があることが判明する。さらに、「山水図巻」に描かれている熊野の参詣道の描写や、各名勝などの位置関係や高低差についても検討してみると、それらが地理的にかなり正確に描かれており、熊野の地形を相当に熟知した人物の制作であることも浮かび上がってくる。こうした状況を念頭に、本発表では、伝南海筆「山水図巻」の位置づけについて、若干の考察を進めてみたい。